

KANSAI*OSAKA

文化力

No.144

2025 AUTUMN・秋

関西から

文化力
POWER OF CULTURE

特集

関西フィルと協演するソリスト選考オーディション ライジングスター・プロジェクト

関西の優れた才能に飛躍のチャンスを
関西フィルハーモニー管弦楽団 総監督・首席指揮者

藤岡幸夫氏

×

関西・大阪21世紀協会 理事長

崎元利樹

表紙：ライジングスター・プロジェクト2024優秀賞
(左から)大屋響さん、林成さん、十河七海さん
(2025年8月11日・住友生命いずみホールにて)

公益財団法人
関西・大阪21世紀協会

関西フィルと協演するソリスト選考オーディション ライジングスター・プロジェクト2025

関西・大阪21世紀協会×関西フィルハーモニー管弦楽団 共催事業
トヨタモビリティ新大阪株式会社寄付



将来活躍が期待される関西の若手演奏家の発掘と成長を促すことを目的に、公募によりオーケストラと協演する機会を提供しようと昨年から始まった「ライジングスター・プロジェクト」。2年目を迎えた今年も多くのエントリーがあり、8月25日、関西フィルの本拠地・門真市民文化会館ルミエールホールでオーディションが実施され、10名のファイナリストの中から、17歳の吉村佳莉風さんが見事ライジングスターに選ばれました。

2025年度 ライジングスター誕生！

非常にレベルの高い戦いとなった今回のオーディション。昨年は該当者が出なかったライジングスターに輝いたのは、プロコフィエフの『ヴァイオリン協奏曲第2番』で挑んだ吉村佳莉風さん。曲の特徴をよく理解した素晴らしい表現が評価され、来年8月に行われる「Meet the Classic Vol.50」への出演を勝ち取りました。他にも、優秀賞に亀岡航紀さん（トロンボーン）と山田唯雄さん（クラシックギター）が選ばれ、審査委員長の藤岡幸夫さん（関西フィル総監督・首席指揮者）より、「Meet the Classic」以外の演奏会で必ず協演する機会を設けると発表がありました。



受賞者と審査員の皆さん

吉村 佳莉風さん

17歳（ヴァイオリン）
東京藝術大学音楽学部附属
音楽高等学校3年生



楽器も年齢層も幅広いコンテストで少しハードルが高いかと感じていたので、選ばれて本当に嬉しいです。本番に向けてオーケストラの皆さんと対話できるような音楽づくりを目指して、お客様に私の音楽をしっかり届けられるよう真摯に向き合っています。

優秀賞

亀岡 航紀さん

27歳
（トロンボーン）
関西フィルハーモニー
管弦楽団 トップ奏者



オーケストラで吹くことと、ソリストとして演奏することはバクトルが違います。その違うバクトルで勝負して評価を頂いたことは、大きな自信になりました。

山田 唯雄さん

30歳
（クラシックギター）
ワイマール
フランクフルト音楽大学
演奏家資格課程在籍



ギターはコンクールで優勝しても注目される機会が少ない楽器です。すべての楽器に開かれた今回のようなオーディションで評価され、しかもコンサートをしましうといってもらえて希望を感じました。

「Meet the Classic Vol. 50」で協演

開催：2026年8月9日（日） 会場：住友生命いずみホール（大阪市中央区）

主催：関西フィルハーモニー管弦楽団 共催：関西・大阪21世紀協会（トヨタモビリティ新大阪株式会社寄付）

関西の優れた才能に飛躍のチャンスを ライジングスター・プロジェクトに 込めた思い



『特別対談』

関西フィルハーモニー管弦楽団
総監督・首席指揮者

藤岡 幸夫 氏



関西・大阪21世紀協会
理事長

崎元 利樹



今年、関西からノーベル賞受賞者が2名輩出され、あらためて関西の学術研究の革新性が注目されました。文化・芸術分野においても、関西には優秀な人材が育つ土壌と高いポテンシャルを持った若者が多くいます。ライジングスター・プロジェクトは、そんな高い志と卓越した技量を持つ若い演奏家に、関西から世界に羽ばたくチャンスをつくります。

ソリストを選ぶ眼

崎元 ライジングスター・プロジェクトでは、2年目にして待望のライジングスターが誕生し、とても嬉しく思っています。同時に、演奏家として高いレベルにあっても、オーケストラのソリストとなると、さらに突き抜けた実力や実績が求められるというクラシック音楽界の厳しさも知りました。

藤岡 甘くないですよ、演奏会のソリストになるというのは。関西フィルと協演するソリストは、国際コンクールで優勝するような実力を持った一流の演奏家ばかりです。特にライジングスター・プロジェクトは、そんな私たちが25年間ずっと大切にしてきた「Meet the Classic」で大勢のお客様を前にデビューするわけですから、とりわけ厳しく選考しています。ですから残念ながら初年度はライジングスターの該当者はありませんでした。

ハイレベルで拮抗

崎元 オーディションの審査にあられた藤岡さんは、今年度の挑戦者をどのようにご覧になっておられますか。

藤岡 ライジングスターに選ばれた吉村佳莉風(かりな)さんは、国際コンクールに出ても上位の成績を上げられると確信できるほど、レベルが高く、これからが非常に楽しみ。

惜しくも優秀賞となった二人、関西フィルの楽団員でもある亀岡航紀(こうき)さん(トロンボーン)も実力があり、国際コンクールに出れば、いい線行くと思いますね。クラシックギターの山田唯雄(いお)さんにいっては、すでに数々の国際コンクールで優勝して世界的に高く評価されているだけでなく、テレビの音楽番組にも出演している実力者です。また、選外となった人でも、ハイレベルな人たちが多かったです。

崎元 上位3人の実力は高いレベルで拮抗していたんですね。

藤岡 そうです。その中で、まだ17歳と若い吉村さんを、今後の期待を込めてライジングスターに選びました。

崎元 こうした人たちに続いて、今後もスター性のある若い演奏家の誕生に期待しています。

藤岡 そのためにはライジングスター・プロジェクトをもっともっと周知していくことが大事ですね。プロジェクトの初年度は、メディアを集めて記者発表したり、関西フィルでも宣伝したりするなど、広報に力を入れました。その甲斐あってオーディションには80名もの応募者がありました。今年度は数こそ及ばせんでしたが、そのレベルは前回に増して高かったです。ソリストを目指す若い人たちは、このプロジェクトの存在や意義をちゃんと知っていて、これに

懸けていることが見て取れました。だから、来年はさらに宣伝していかなくちいけないと思っています。

関西で優れた演奏家が育つ

崎元 関西には、才能と実力を持つ演奏家がたくさんいるということですね。

藤岡 その通り。世界的な弦楽器のソリストには関西出身が多い。例えばヴァイオリンでは、神尾(かみお)真由子さん(大阪府豊中市出身)や木嶋真優(きしままゆ)さん(兵庫県神戸市出身)がおられますし、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の第1コンサートマスターを務める榎本大進(かしもとだいしん)さんは、生まれはロンドンですが、お母さんの故郷である兵庫県赤穂市でも活動を続けています。

崎元 どうして関西から優れた演奏家が多く出るのでしょうか。

藤岡 なんといっても、関西には優れた指導者が多くいらっしゃるからです。神尾真由子さんを育てた小栗まち絵さんや工藤千博さん(2009年没)しかり。奈良にも岩谷悠子さんなど、優れた指導者によって、多くの若いヴァイオリニストが育ち世界で活躍しています。そして、何より関西にはプロを目指している若い演奏家がたくさんいるんです。オーケストラの話をする、プロのオーケストラは、公益社団法人日本オーケストラ連盟(東京)に正会員として加盟していて、この正会員は確かに東京の方が多いのですが、準会員のオーケストラは関西の方が多いんです。これは、音楽大学を卒業して将来はプロとして活動したいという人が多いということ、とてもいい傾向だと思っています。

関西回帰の土壤づくり

崎元 なるほど。優れた指導者も多く、音楽の道を目指す人たちも多いということですね。ただ、一方には若い演奏家の多くが東京へ流出してしまうという残念な現状があります。

藤岡 その原因は、単純に人口の差です。東京の人口はおおよそ1,400万人で、大阪は870万人あまり。仕事量でいえば、東京の方が圧倒的に多い。高い給料を出すオーケストラも多いですから、そこで働きたくなるのは当然といえます。こうした仕事量の差は、どうしようもない現実です。東京は住宅費が高いですから、今後は大阪に住んで東京で稼ぐというソリストも出てくるかもしれません。だから海外や東京で研鑽を積んだ人たちが、再び大阪・関西に戻ってくるような土壤をつくるのが大事で、音楽を目指す若い人たちの思いを受けとめて支えるシステムを用意しなければならないと思っています。

崎元 どのような土壤を作ればよいのでしょうか。

藤岡 今年、私が関西フィルの総監督になってまず取り組んでいるのが、楽団員の給料を上げるなど、待遇面での改善です。レベルの高いオーケストラとして永続的に活動していくためには、プレーヤーの高い実力に見合った給料を払い続けること、つまりシステム化が絶対条件です。そうして良いプレーヤーが入ってくことで、音楽的にもさらに上を目指していくことができます。そのためには資金が必要で、幸いなことに、関西フィルには資金面で支援くださる大手企業様がいくつもあって、大変感謝しています。私が関西フィルと関わるようになって四半世紀経ちます。

優秀賞3名が関西フィルと夢の協演 ライジングスター・プロジェクト2024 トヨタモビリティ新大阪株式会社寄付

主催:公益財団法人 関西・大阪21世紀協会
共催:公益財団法人 関西フィルハーモニー管弦楽団



りん せい
林 成さん (チェロ)

演奏曲 ドヴォルザーク:チェロ協奏曲 口短調
作品104より 第1楽章

音量の大きなオーケストラに圧倒されそうになりましたが、それに負けない音量を意識して弾きました。人と合わせるときの呼吸やアイコンタクトの取り方など、コミュニケーションの重要性にも気づきました。今後はバロック音楽にも本格的に取り組み、作品の背景や様式に即した演奏を目指したいです。(東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校1年生。「第22回 泉の森ジュニアチェロコンクール」中学生の部、金賞受賞)



おおや ひびき
大屋 響さん (ヴァイオリン)

演奏曲 ブラームス:ヴァイオリン協奏曲 ニ長調
作品77より 第3楽章

大きなホールで演奏できて嬉しかったです。緊張しましたが、それ以上に楽しさや幸せな気持ちが勝って、あっという間の時間でした。藤岡先生からは、演奏家として生きるためのアドバイスもいただき、とてもありがたかったです。海外は未経験ですが、今後は、音楽の理解を深めるため、学びの場として海外に挑戦したいです。(相愛高等学校音楽科3年生。2024年に大阪府池田市で初のソリリサイタルを開催)



そこう ななみ
十河 七海さん (コントラバス)

演奏曲 ラーシュ=エリク・ラーション:コントラバス・
コンチェルティノ 作品45-11

藤岡先生から、「オーケストラは伴奏ではなく、一緒に音楽を作るんだから」といわれ、ソロではあるけれど弦楽合奏としての自覚を持ちました。最後はオケの皆さんを信頼し、もっと自由に音楽を奏でられることに気づき、自らの成長を感じました。プロとして信頼を得るため、演奏への熱量は変えずに仕事にも誠実に向き合っていきたいです。(東京藝術大学大学院修士課程修了。国内主要楽団への客演やソリリサイタルを開催)

つくづく感じることは、関西人は、良いものをいかに安く手に入れるかにこだわる一方、良いと思ったら、とことん応援して文化を育もうという気質があるということです。こうした皆さんからの信頼に応えるためにも、5年以内に関西フィルを海外や東京で学んだ若い演奏家が是非とも入りたいと思えるオーケストラに必ずしてみせます。

地方のオーケストラを全国区に

崎元 藤岡さんは、クラシック音楽のテレビ番組「エンター・ザ・ミュージック」(BSテレビ東京・毎週土曜朝8時30分放送)を持たれていますよね。

藤岡 2014年に放送を開始して、今年で11年目です。それまでテレビのクラシック音楽番組といえば、東京のオーケストラが出演するのが当たり前になっていました。私がかつてヨーロッパに住んでいて感じたのは、首都圏以外の都市でも経済的にも文化的にも豊かだということです。私は東京生まれですが、なんでもかんでも東京一極集中という状況はやめなきゃいけないと考えています。関西フィルのように、地方のオーケストラが全国放送で、しかもレギュラーで出演する番組はこれだけです。関西の優れたソリストや素晴らしいホールなどを全国の皆さんにもっと知っていただきたいという思いで取り組んでいます。

才能ある若者を支援

崎元 最後に、若い演奏家に向けてメッセージをお願いします。

藤岡 プロを目指して頑張っている若い演奏家の皆さんには、ぜひ海外へ行ってほしい。私が理事を務めている公益財

団法人山岡トロイメライ音楽財団(大阪市)では、大阪の若く優秀な演奏家に奨学金を出し研鑽を積んでもらい、将来海外デビューさせることを目的にしています。私も、優秀な成績を収めた奨学生には、関西フィルで協演すると約束しています。ライジングスター・プロジェクトでも、これをステップにして、そうした財団からの奨学金を得て、海外でさらに実力をつけて帰ってきてほしい。加えて、それを支援する制度がもっとできてほしいですね。

崎元 関西には若い演奏家が多く指導者にも恵まれている。そして、それを支える支援の輪も広がっているということで、関西のクラシック界の今後は大いに期待できそうですね。

藤岡 そうですね。先ほどもお話ししましたが、関西では、良いオーケストラ、良い指揮者だと認められれば、毎年のように演奏会の声がかかります。本当に良質だと分かれば、しっかり応援してくれるところが関西の文化度の高さといえるでしょう。大阪には4つのプロのオーケストラがあり、それぞれ強力なサポーターがついています。お互いに切磋琢磨してレベルを上げ、若い演奏家が関西に戻って演奏したいと思える土壌をつくっていききたいと思います。

崎元 今日、お話をお聴きして「ライジングスター・プロジェクト」の意義を改めて認識しました。若い演奏家の皆さんの活躍の場が広がり、関西フィルハーモニー管弦楽団をはじめとする関西のクラシック界が、一段と活気に満ち溢れることを期待しております。本日はありがとうございます。

(2025年9月3日・関西フィルハーモニー管弦楽団〈大阪府門真市〉にて)

「Meet the Classic vol.49」 ほとばしる若き才能の響きと成長

2025年8月11日、住友生命いずみホール(大阪市)において、「ライジングスター・プロジェクト2024」の優秀賞に選ばれた3名が、関西フィルハーモニー管弦楽団との協演を果たしました。この日に備えて鍛錬を重ねた3名は、夢の舞台で堂々たる演奏を披露し、満員の会場から万雷の拍手が送られました。指揮を執った藤岡幸夫氏は、「オーディションから1年を経て、皆すごく成長した。エキサイティングな演奏に、若々しい情熱を感じた」と称え、若き才能の前途に期待を寄せました。



演奏を終えてほっと一息の皆さん
(左から)十河さん、林さん、大屋さん

藤岡 幸夫 氏

1962年東京生まれ。幼少よりピアノ、チェロを学ぶ。小学4年で指揮者になる夢を持ち、慶應義塾大学文学部卒業後、日本フィル指揮研究員に選ばれる。1990年英国王立ノーザン音楽大学指揮科入学(奨学金特待生)。1994年ロンドンにてBBCフィ



ルハーモニックを指揮してデビュー。(写真提供: 関西フィルハーモニー管弦楽団)

EU諸国の最も才能ある若手指揮者に贈られる「サー・チャールズ・グローヴス記念奨学賞」(1993年)のほか受賞多数。マンチェスター室内管弦楽団首席指揮者、日本フィル指揮者を歴任。2025年より現職。

公益財団法人 関西フィルハーモニー管弦楽団

1970年発足。2018年公益財団法人化。2015年に東大阪市と「文化芸術のまち推進協定」、2020年に門真市と「音楽と活気あふれるホームタウンパートナー協定」を結ぶなど、関西の人々や企業に育まれた楽団として地域密着を重視。関西出身の若手アーティストも積極的に起用。大阪府門真市末広町31-8 サンコオア第3ビル6階。

学校アートプログラム (文化芸術による次世代育成事業)

「学校アートプログラム」は、学校教育の中で、子どもたちがアーティストと共に活動する体験を通して、創造性や人間力を育むきっかけとなることを目的としたものです。

今年度は泉南市主催事業として、学校から抜け出し、公募型ワークショップを開催しました。

公募型ワークショップを開催

2021年度より実施している本プログラムは、これまで小学校の授業として展開してきましたが、今年度は泉南市の主催事業として“公募型”ワークショップを開催。学校単位ではなく、子どもたちが自由に参加できる形式として初めての試みとなりました。

「アフリカンパーカッション・ダンス ワークショップ」と銘打って、ジェンベ(アフリカの太鼓)やダンスと泉南市の長柄音頭を組み合わせ、2025年8月23日に実施しました。

子どもたちはアフリカの民族衣装を身にまとい、顔や手にペイントを施して参加しました。会場は熱気に包まれ、地域の人々から大きな拍手が送られました。

今回は、地域とつながる新しい形として、当協会にとって大きな意味を持つものとなりました。今後も、自治体や学校、地域の団体など様々な連携を模索し、子どもたちの創造力を育む活動を広げていきます。



アフリカの民族衣装でダンス



ジェンベのワークショップの様子



長柄音頭とコラボレーション



NHKの取材の様子

NHKが取り組みを紹介

ワークショップの様子は、NHKの取材を受け、10月に「ぐるっと関西おひるまえ」内のコーナー「学校へどーも！」で放送され、子どもたちがアーティストとともに創造する姿や、地域の人々が見守る様子が丁寧に紹介されました。このほか小学校での実施プログラムも紹介され、本取り組みをより多くの人々に知っていただくきっかけになりました。

2025年度の実施校

2025年度も、アーティストとの出会いを通じて、子どもたちが表現し、創造性や人間力を育む場を提供していきます。

	自治体	小学校名	実施学年	内容
協会主催	岸和田市	岸和田市立中央小学校	5・6年生	アフリカンパーカッション
	熊取町	熊取町立北小学校	4年生	教室にかくれた形で作るステンドグラス模様
		熊取町立中央小学校	4年生	廃材を使って顔を作ろう
	岬町	岬町立淡輪小学校	5年生	家から学校までの地図を作ろう ※和歌山県立近代美術館と連携
		岬町立深日小学校	5年生	チェックカラーレター ※花王株式会社と連携
		岬町立多奈川小学校	5年生	チェックカラーレター ※花王株式会社と連携
自治体主催	泉佐野市	泉佐野市立第三小学校	2年生	アフリカンパーカッション
	泉南市	(公募型)	小学生	アフリカンパーカッション・ダンス
	阪南市	阪南市立上荘小学校	2年生	廃材で阪南の海の生き物を作ろう
			4年生	私の海のバンダナ作り
	岬町	岬町立多奈川小学校	5年生	廃材と竹を使った造形物作り

報告 万博会場でart bridgeの作品を展示 2025年7月26日(土)・27日(日)

EXPO2025に懸ける7つの思い

art bridge® x Art to Live®

もっと身近にインクルーシブアート

7月26日(土)・27日(日)の2日間、EXPO2025大阪・関西万博ギャラリーWESTで、Art to Liveの展覧会『アートを社会で活かす』が開催され、当協会が事業主体として展開しているart bridgeの作品7点が展示されました。

Art to Liveは、大阪府が推進する「2025大阪・関西万博に向けた障がいのあるアーティストによる現代アート発信事業」として、2024年6月に始動。本展では、大阪府内の福祉施設や団体がアートを介して他分野と連携した7事例の紹介、展示・映像・ワークショップなどが展開されました。

art bridgeは、その事例の1つとして作品7点のほか、事業紹介パネルや作品の設置写真などで取り組みを伝えました。また、来場した作家のMOMOさんの家族も、展示された作品を目の当たりにして感動した様子でした。

art bridgeは、多様な背景を持つアーティストの作品を貸し出し、その感性に触れることで理解を深めてもらうことを目的とするプロジェクトです。万博という国際的な舞台を通じ、その理念を広く発信するとともに、アーティストの社会参加意識が高まる貴重な機会となりました。



『Art to Live』(万博会場ギャラリーWEST)



作品(左)の前でほほ笑むMOMOさん

予告 2025年度は、このアーティストたちに注目！

大阪中之島美術館×関西・大阪21世紀協会 共同企画

Osaka Directory Supported by RICHARD MILLE

おおさか ディレクトリ サポート バイ リチャード ミル

関西ゆかりの若手アーティストの作品を個展形式で紹介する本企画は、今年で4年目になります。大阪中之島美術館を舞台に、次代のアートシーンを彩る若き才能が登場します。

金光男

11月15日(土)~12月14日(日)



出身地大阪で初となる美術館での個展にあたり、自身の家族のルーツにも関わる、蟬が溶けてゆく流動的な作品を発表します。



本展のための参考画像 2025年

天牛 美矢子

12月20日(土)~2026年1月18日(日)



歴史や神話など、本の挿絵を思わせるイメージを布や皮などを使って表現。大空間を活かしたインスタレーションを展開します。

(撮影: Ujin Matsuo)



《あの子らはええね》2023年 (撮影: 今村裕司)

和田 真由子

2026年1月24日(土)~2月23日(月・祝)



「イメージにボディを与える」をコンセプトに、立体・平面作品を制作。馬や鳥など、自身が抱くイメージの再現を試みます。

(撮影: 福永一夫/Fukunaga Kazuo)



《ヨット》2013年 (撮影: 児玉画郎)

協賛

サントリーホールディングス株式会社、ロート製菓株式会社、NTT西日本株式会社、ダイキン工業株式会社、株式会社丹青社、株式会社モンベル、株式会社エクスプレス、京阪ホールディングス株式会社

会場: 大阪中之島美術館 2階多目的スペース 観覧料: 無料



御田植神事（住吉大社）の映像などを映し出して日本食文化を紹介



大阪・関西万博 ORA外食産業パビリオン

日本食 Wonder Trip

～世界に誇る日本食魅力発見の旅～実施報告

テーマウィーク「食と暮らしの未来」期間中の2025年6月7日（土）に開催

主催：一般社団法人大阪外食産業協会、食博覧会実行委員会、公益財団法人関西・大阪21世紀協会

未来へつなぐ日本食—

万博で体験する“Wonder Trip”

万国博覧会という国際舞台から日本食の魅力と文化的背景を世界へ発信するイベント「日本食 Wonder Trip ～世界に誇る日本食魅力発見の旅～」を開催。クイズ形式で日本食の歴史と未来を来場者と共有し、文化資源としての日本食の可能性を体感いただく好機となりました。

万博で体験する“日本食の旅”

本イベントは、日本食の魅力を再認識し、次世代へ継承することを目的とする特別プログラム。関西・大阪21世紀協会が大阪外食産業協会、食博覧会実行委員会との共催で、大阪・関西万博のテーマウィーク「食と暮らしの未来」期間中の2025年6月7日に開催しました。会場のEXPOホール「シャインハット」は、国内外から詰めかけた多くの来場者で満席の盛況となりました。

総合司会にはフリーアナウンサーの八木早希さんを迎え、ナビゲーターとしてフードコラムニストの門上武司氏、大阪大学総合学術博物館副館長・教授の船越幹央氏が登壇。日本食にまつわる歴史・文化・技術を、専門的な視点からわかりやすく紹介し、来場者が楽しみながら学べるよう構成しました。

冒頭、360度スクリーンに町人の暮らしや四季の風景が描かれた歴史絵巻が映し出され、日本食の成り立ちや文

化的背景を紹介するナレーションが流れる中、司会の八木さんが登場。華やかにイベントが幕を開けました。

続いて、来場者はスマートフォンを使って4択クイズに挑戦。海外からの来場者のため、スクリーン両側にはAIによる即時翻訳も表示され、日本食の魅力と文化的背景とともに競い合いながら楽しく学ぶ空間が広がりました。

精神性に触れる—日本食と和食の違い

第1部「日本食の精神世界へ」では、日本食と和食の違いに焦点を当て、食文化に宿る精神性を紐解きました。

門上氏は「日本食とは、現代の日本人が日常的に食べる料理全般を指し、カレーライスやラーメンなど外国由来でありながら日本独自に進化した料理も含まれる」と説明。一方で「和食」は、素材の味を生かす調理法、だしを基盤とした味付け、米を中心とした構成、季節感を大切にす料理であり、日本の食文化の根幹を成すものだと言いました。船越氏は、約2000年にわたる日本の食文化の変遷を紹介。稲作や魚介類を中心とした食文化が育まれ、大陸との交流を通じて茶などの外来文化が融合。四季折々の年中行事と密接に結びついた食文化が形成されてきたと解説しました。また、「いただきます」「ごちそうさま」の語源や、「宴（うたげ）」という意味の由来にも触れ、日本食が神仏や自然の恵みと深く結びついていると述べました。



旨味と水－日本食の技と知恵

第2部「日本食の魅力を紐解く」では、日本料理の技術と知恵に焦点を当てました。

門上氏は「日本料理は水の料理」と語り、昆布やかつお節から引き出される旨味、味噌や醤油などの発酵食品が織りなす味の層、そして五味(甘味・塩味・酸味・苦味・旨味)を巧みに生かす調理技術を紹介しました。

さらに、2024年にユネスコ無形文化遺産に登録された日本の酒造りにも言及。船越氏は、灘(兵庫県)・伏見(京都府)・西条(広島県)という三大酒処がいずれも良質な水に恵まれていることを紹介し、「水が文化を育てる」という視点を提示。酒造りが祭事や婚礼などの社会文化的行事を支えてきたことを伝えました。

世界に広がる日本食の可能性

第3部「世界へ誇る日本食」では、日本食が世界に広がる背景と未来への可能性を紹介。農林水産省の調査によると、海外の日本食レストランは2013年の約5万5,000店から2023年には約18万7,000店へと急増。門上氏は、日本食が「健康的」「繊細な味付け」「美しい盛り付け」といった点で五感に訴える食文化であることが、世界で評価されている理由だと分析しました。

また、大阪が世界一の河豚(ふぐ)消費地であることにも触れ、未利用魚の活用による食糧問題への貢献可能性も示唆。船越氏は、「食を通じて相互理解が進み、国際平和の礎となる」と締めくくり、日本食が持つ可能性を示しました。

クイズで盛り上がる会場

イベントでは、来場者参加型の4択クイズが実施され、正解数と回答の速さによって順位が決定。正解発表のたびに歓声が上がり、上位入賞者には豪華賞品が贈られました。

特賞にはペア食事券、副賞には大阪歴史博物館ペアチ

ケット、優秀賞・パビリオン賞にも食文化にちなんだ賞品が用意され、来場者の笑顔があふれるひとときとなりました。

未来へつなぐ日本食文化

日本人にとって“当たり前”の食文化が、世界では先進的であり、トレンドでもある。このイベントを通じて、来場者とともに日本食の奥深さと可能性を再認識し、未来へとつなぐ“旅”を共有することができました。

大阪外食産業協会(ORA)の中井貫二会長は、「日本の食文化は、1970年の大阪万博を契機に進化を遂げ、今や世界を牽引する存在となった。今回の万博は未来社会の実験場であり、日本食文化の新たなスタートとなる場でもある」と語り、未来への展望と文化資源としての日本食の可能性を示しました。

協会が担う、日本食文化の未来への架け橋

本イベントは、協会賛助会員の皆様のご支援により、関西・大阪21世紀協会が大阪外食産業協会、食博覧会実行委員会とともに開催したものです。

当協会は、文化芸術を通じた社会貢献を目的に、日本食文化の魅力を伝える取り組みを支援しています。万博という国際舞台を活用し、こうした文化資源の発信を後押しすることで、地域の活性化と国際交流の促進に寄与しています。



左から、門上氏、中井会長、八木さん、船越氏



株式会社大林組 副社長執行役員
一般社団法人関西経済同友会 代表幹事

永井 靖二氏

ながい せいじ

次代を支える産業の創出に向け 大阪・関西にイノベーターが集う仕組みを

関西経済同友会の「都市間競争戦略委員会」(委員長:永井靖二氏)は、2024年5月、提言「イノベーターが集まる魚礁のような都市像を求めて～『まだ名前のない産業』を生み出す都市へ～」をまとめた。その意図や、大阪・関西万博の会場建設に携わった企業人としての思いなどを、当協会の崎元利樹理事長が伺った。

万博効果

崎元 まずは大阪・関西万博についてお伺いします。開幕前にはさまざまなネガティブな情報も流れていましたが、いざ開幕すると非常に多くの来場者が訪れ、大いに盛り上がりました。永井さんは、この万博が大阪・関西にどのような効果・影響を与えたと見ておられますか。

永井 開幕前は情報発信が控えめだったこともあり、厳しい評価もありましたが、それは出展者が最後までコンテンツの質を高めようと尽力していたからです。開幕と同時に各パビリオンの内容が公開され、SNSを中心に静かに、しかし確実に広がっていきました。出展国や企業の努力の結果であり、狙い通りの盛り上がりだったと思います。

1994年のBIE(博覧会国際事務局)総会では、万博は人類共通の課題の解決策を提示する場であるべきとの方針が示されました。ハノーヴァー万博(2000年)では「環境」、ミラノ万博(2015年)では「食」がテーマとなり、今回の大阪・関西万博では「いのち輝く未来社会のデザイ

ン」が掲げられました。これはSDGsの達成や日本政府が提唱する未来社会の姿「Society 5.0」の実現を目指すものです。夢洲ではキャッシュレス決済や顔認証が導入され、デジタル技術が生活に密着する形で浸透しています。交通手段の予約アプリ「関西MaaS」もその一例です。こうした人々の行動変容は、万博の狙いが社会に浸透してきているように感じています。

未来への可能性—6つの領域

永井 経済人の立場からは、イノベーションの創出や中小企業の活性化が重要です。今回の万博では、ライフサイエンス、モビリティ、環境・エネルギー、観光、イノベーション、そして木の活用という6つの領域が強くアピールされました。これらは、私自身が万博を通じて今後発展していく可能性があると考えた分野です。

ライフサイエンスでは、iPS細胞など健康・医療に関する最先端技術が注目され、モビリティでは空飛ぶクルマのデモ飛行や自動運転レベル4(限定区域内での完全無人化運転)の実現に向けた取り組みが進められています。環境・エネルギーでは、e-メタンやペロブスカイト太陽電池、核融合発電などの新技術が紹介され、観光では夢洲をゲートウェイとした国際的な交流

の可能性が示されました。イノベーション領域では、関西のもののづくりの底力をアピールする機会となり、大屋根リングに象徴される木の活用は、日本の文化や技術を世界に発信するものであり、光合成の効果を考慮した50年ごとの植え替えによる脱炭素の推進や、心身の健康＝ウェルビーイングな空間の創出にもつながると考えています。

会場建設の舞台裏

崎元 6つの領域について大阪の実力を世界に示す機会となり、日本全体の経済発展にもつながる節目だったと思います。建設業に携わるお立場として、今回の万博ではどのような苦労がありましたか。

永井 大阪・関西万博は、「うめきた2期」や「夢洲コンストラクション」とともに、内閣府の「スーパーシティ型国家戦略特別区域」に指定されています。そこで大阪府市は、AIなどのデジタル技術を活用して世界に先駆けた未来の生活を実現する「スーパーシティ構想」を推進し、万博会場の建設においても、工事車両の渋滞対策や建設作業員の安全・健康などをデジタルで管理する未来型の建設システムの導入が求められました。

当社は、4つのJV(共同企業体)のなかで、建設プロジェクトにおける進行や管理を行う統括施工管理者の役割を担いました。例えばAIによる顔認証技術を活用して作業員の工事現場への入退場を迅速化することで、生産性の向上につなげたのです。万博の開幕に向けて良い機運を高めていくためにも、現場の安全管理は最も神経を使う仕事です。こうして工事が無事終了し、開幕を迎えることができました。工事関係者の皆様には感謝しています。

魚礁のような都市

崎元 万博を契機に、関西の都市像そのものにも新たな視点が求められています。未来の都市のあり方について、関西経済同友会のご提言について伺います。東京一極集中が依然として続くなか、大阪・関西の各都市は、どのような未来像を目指すべきだとお考えでしょうか。

永井 関西経済同友会の提言「イノベーターが集まる魚礁のような都市像を求めて～『まだ名前のない産業』を生み出す都市へ～」では、次代の関西を支える産業を生み出すようなイノベーターが関西から生まれ、関西に集まる仕組みを整えることが重要だと主張しています。すでに大阪には、ナレッジキャピタル(グランフロント大阪)、JAM BASE(グラングリーン大阪)、QUINTBRIDGE(NTT西日本)、未来医療国際拠点 Nakanoshima Cross(中之島クロス)などのオープンイノベーション施設があり、スタートアップ企業やそれを支援する企業、大学、研究機関などが、より良い未来づくりへのマインドを高めています。大阪・関西においては、いろんな業種が関わり合って新しいものを生み出していく可能性も高いと思います。今こそ、そうした長期的な視座を持ち、関西人に何ができるかを考えるときです。イノベーターを回遊魚に例えるなら、関西は回遊魚が集まってくる魚礁都市となるべきです。大阪・関西万博は、その絶好の機会でもあります。

企業が担う文化と教育

崎元 文化や教育との関わりにおいて、企業が担うべき役割についてはどのようにお考えでしょうか。

永井 個社の話で恐縮ですが、当社では『季刊大林』という広報誌を発行し、企業としての文化発信に取り組んでいます。建

設業の視点から人類が築き上げてきた文明・文化を考証し、未来社会のあり方を模索するもので、エジプトのクフ王のピラミッド(創刊号・1978年)や大阪城(第16号・1983年)を取り上げて、現代ならばその建設にどれほどの工期・費用・労働力がかかるかを検討したこともあります。

また、先ほど述べた樹木の特性を考慮し、1万5,000人規模の未来の木造の街構想「LOOP50」も取り上げました。全体を50分割して50年に1回ずつ建て替えるのです。『季刊大林』は企業メセナとしてずっと取り組んでいます。

教育については、AIによって瞬時に解答が得られる時代にあって、不確実な状況や答えのない問題に直面したときの決断力を養うために、人間としての直感力や感性を磨くことが重要です。そのためには、文学・芸術・社会科学・自然科学など、実用的な目的から離れた教養＝リベラルアーツの教育が必要ですが、これを学校任せにするのではなく、個人や企業が意識的に関わることも大切だと考えています。

崎元 課題解決のために人間力を養うべきというご指摘は、まさにその通りだと思います。今のところAIで人間力をつけるのは難しいですからね。本日はありがとうございました。



「LOOP50」『季刊大林』(NO.58「森林」)／2017年度発行)



聞き手 崎元 利樹

公益財団法人 関西・大阪21世紀協会 理事長

(2025年9月1日／株式会社大林組 大阪本店にて)

永井靖二氏

1958年山口県下関市出身。1982年大阪大学工学部建築工学科卒業。1982年入社。「なら100年会館」工事長などを経て41歳で営業畑に転じ、常務執行役員広島支店長、専務執行役員大阪本店建築事業部長などを歴任。2024年より現職。

株式会社大林組

本社：東京都港区港南2丁目15番2号。1936年設立(1892年創業)。資本金577.52億円。従業員数9,386人(2025年3月末現在)。国内外建設工事、地域開発・都市開発・その他建設に関する事業およびこれらに関するエンジニア業務、不動産事業など。

(写真提供：株式会社大林組)

「上方落語若手噺家グランプリ」10年の支援と成果

若手噺家の登竜門として定着

「上方落語若手噺家グランプリ」は、上方落語の伝統継承と若手噺家の育成を目的に毎年行われている登竜門レースで、今年で11回目を迎えました。2015年にアートコーポレーション株式会社の寺田千代乃社長（現・名誉会長）がアーツサポート関西（ASK）にファンド（寄金）を設け、アーツサポート関西から10年間にわたり毎年50万円を助成していく形でスタート。毎回会場の天満天神繁昌亭（大阪市北区）では前売券が即日完売するほどの盛況ぶり、最終回となる第10回の節目に、寺田氏から11回以降も継続してご支援いただくとの発表があり、存続が決定しました。

参加資格は入門4～18年の若手中心の噺家。40名ほどのエントリーの中から予選を勝ち抜いた8名で決勝戦が行われます。審査は、規定の持ち時間を1秒でも外すと大幅な減点となる厳しいルールによるもの。出場者たちはグランプリを目指して稽古に励み、回を重ねるごとにレベルは高くなっていました。

グランプリ受賞者たちは「こうした機会を出演者全員が喜んでいる。大阪の若手はこんなに頑張っていることを知ってほしい」（桂吉の丞さん／第1回）、「このコンテストで大いに勉強し、成長させてもらった」（桂雀太さん／第5回）、「関西は賞が



第10回の授賞式にて
右から寺田千代乃氏、優勝の笑福亭笑利さん、準優勝の笑福亭呂好さん、
上方落語協会会長・笑福亭仁智さん。（2024年6月19日／天満天神繁昌亭）

少なく東京に受賞歴で負けていたが、これで挽回できた」（桂惣兵衛さん／第9回）。このグランプリは若手の登竜門として今や欠かせない存在。これからも彼らの目標となり続けることでしょう。

若手への注目と革新的なネタにも期待



桂 文珍さん

審査員長・
上方落語協会 若手育成特別顧問

若手の皆さんが注目されて、芸が充実して、前に進んで行けるようにと思っており。そして、落語という伝統芸能を守ると同時に、古典だけではなく、革新的なネタも次々と発表してもらいたいです。

前回までは決勝戦の出番順を事前に決めていましたが、今回からは、当日、お客様の前でクジを引いて決めるというイベント性を持たせました。そのため、演者は出番や客席の雰囲気に合わせて、臨機応変にネタを演じるアドリブ感覚なども重視さ

れます。審査員の方々も、日頃から上方落語をよく聞いていただいている皆さんを新たに人選いたしましたので、良い結果が出ると思っております。

第11回審査要項

- ・対象者は2007年～2021年入門者
（第11回は78名中、エントリー42名）
- ・合計600点（審査員1名あたり100点×6名）で勝敗を決め、得点を公表。
- ・持ち時間は予選9～11分、決勝戦9～12分
- ・優勝賞金40万円。
- ・審査員
桂文珍、恩田雅和（天満天神繁昌亭アドバイザー）、
伊藤史隆（神戸新開地喜楽館支配人）、
熊谷岳志（NHK大阪放送局）、日高美恵（よせびっ編集部）、
福島暢啓（毎日放送アナウンサー）（敬称略）

歴代優勝者

第1回（2015年）

桂吉の丞

（2002年入門／大阪府出身）



第2回（2016年）

笑福亭たま

（1998年入門／大阪府出身）



第3回（2017年）

桂米輝

（2011年入門／奈良県出身）



第4回（2018年）同点優勝

桂米之助（当時・桂ちようば）
（2001年入門／京都府出身）



桂三度

（2011年入門／滋賀県出身）



第5回（2019年）

桂雀太

（2002年入門／奈良県出身）



第6回（2020年）

桂三四郎

（2004年入門／兵庫県出身）



第7回（2021年）

桂小鯛

（2007年入門／岡山県出身）



第8回（2022年）

笑福亭生寿

（2007年入門／奈良県出身）



第9回（2023年）

桂惣兵衛

（当時・桂そうば）
（2005年入門／福岡県出身）



第10回（2024年）

笑福亭笑利

（2014年入門／京都府出身）



（敬称略）

11年目の挑戦で悲願の栄冠

2025年度(第11回)優勝

林家染吉さんに聞きました

11年目に入り新たなスタートを切った「上方落語若手噺家グランプリ」。第1回(2015年)から出場し続け、今年、出場資格(入門18年未満)のラストイヤーで悲願の優勝を手にした林家染吉さんに、その胸の内を聞きました。

ラストイヤーでの受賞のお気持ちは?

若手といわれている間に、どうしても取りたい賞でした。これが最後の挑戦でしたから、「優勝」と聞いた瞬間、ほっとして涙が出ました。実は、年季明け*のときに、師匠(林家染丸さん)から、「お前は不器用で、鳴り物や踊りができるわけでもなく、気の利いたこともいせん。これからどうして生きていくねん」といわれて、「ほな、賞を取れるような噺家になります」って宣言したんです。年季明けして初めて参加したコンテスト「小枝杯」では、2度の月間チャンピオンに輝きましたが、グランドチャンピオンを逃してしまいました。それ以降は、優勝や大賞と名のつくものは何も取れてません。上方落語若手噺家グランプリには第1回から挑戦しており、これまで4回決勝に進みました。特に第9回は準グランプリと優勝まであと一步でしたので、今回、師匠は泣いて喜んでくれました。

*師匠の付き人として修業期間を経て独り立ちする時期。

クジでトリ(最後の出番)を引いたときの思いは?

すごいチャンスやと思いました。前に出た人たちのウケ具合を見てネタを変えられる“後出しじゃんけん”ができるんです。私には200近くの持ちネタがあります。100超えたら多いといわれるので、かなり多い方だと思います。その中から、怪談噺、人情噺、滑稽噺と、古典・新作含めて6つぐらい得意ネタを準備していました。私のような芸歴の長い者にとって、トリは有利です。コソコソと落語をしてきてよかったと思っています。

笑いの少ない怪談噺を選ばれたのは?

以前、予選で『腕食い』という怪談噺をしたとき、審査員の方から「笑いがいい噺でも、きちんとやれば予選通過できるということとを、お前が示してくれた」といってもらえたことがあり、今回も他の出場者と被らない『高台寺』(幽霊鮎)を選びました。笑わせるところは少ない噺ですが、審査員長の桂文珍師匠から「要所要



所で笑いをきちんと取っていた」と評価していただき、嬉しく思っています。

入門から修業時代の思い出といえば?

大学祭に染丸師匠と染二兄さんが出てくださり、私が前座を務めました。このとき、染二兄さんに褒めてもらって「是非とも、わが林家一門に」といってくださったのを真に受けたのが噺家人生の始まりです。付き人時代には失敗もたくさんしました。ある日、



師匠から「スーパーで鮭を買って、帰りにこの手紙を投函してきてくれ」と頼まれたのですが、何を思ったのか、買った鮭をポストに入れて、手紙を持って帰ってきてしまいました。師匠から、「お前は生きてるだけでおもしろいやつやな」と大笑いされました。

師匠は優しさに溢れる人格者です。「いい落語は、いい人にしかできない」というのが信条で、「いい人とは、愛される人や」と教えられました。以来私は、愛される人になるために、感謝を忘れない心を持とうと考えるようになりました。

将来はどんな噺家になりたい?

そうですね、実力と人気に伴って、お客さんが満足してお帰りになる、そんなトリを任せられる噺家になりたいです。新作(創作)落語にも力を入れ、古典落語に新しい笑いを吹き込んでみたいですね。えっ、グランプリを目指す後輩に一言ですか? うーん、頑張れっていうのも上から目線やし…。そうそう、大リーグの大谷翔平選手が球場でゴミ拾いをして、「運も実力のうちで、運を引き寄せるためにやっている」というのを聞いて、私も繁昌亭の周りのゴミ拾いをしたり、進んでトイレ掃除をしたりしましたね。まあ、こんなふうに、繁昌亭も綺麗になってええのとちゃいますか。

(聞き手:ライター 三上祥弘)

林家染吉(はやしや そめきち)

1981年三重県生まれ。南山大学法学部(落語研究会)を卒業後、2007年に林家染丸に入門。2011年第1回繁昌亭ドリームジャンボコンテスト小枝杯6Rチャンピオン、2012年第2回同杯7Rチャンピオン。

日本万国博覧会記念基金事業

2025年度助成金および奨学金贈呈式&事例発表会

2025年8月7日／大阪工業大学 梅田キャンパス 常翔ホール

国内外64団体に 総額2億円を助成

関西・大阪21世紀協会は、2025年度の万博記念基金助成事業として、国内外から申請された316件の中から64件を採択し、総額2億円の助成を決定しました。また、日本文化を研究する外国人留学生(大学院修士課程)を対象とした奨学金給付事業については、全国の8大学からそれぞれ推薦された6名に奨学金の給付を決定しました。

8月7日にその贈呈式が行われ、出席した助成事業者32団体の中から、代表として3団体と奨学生6名に崎元利樹理事長から目録が手渡されました。

贈呈式の後、2024年度助成事業者から1団体、2025年度助成事業者から1団体の事例発表が行われました。



2025年度の助成団体の皆さん

2025年度 申請と採択の内訳

	申 請		採 択	
国内外合計	316件	13億1,855万円	64件	2億円
国外事業者(内数)	(36件)	(1億3,191万円)	(4件)	(1,170万円)

※申請件数316件および採択件数64件には、それぞれ2023年度・2024年度の複数年度助成事業(継続)各1件を含みます。

2025年度奨学生決定

日本文化を研究する外国人留学生への 奨学金給付事業

万博記念基金では、「日本文化を研究する外国人留学生を対象とした奨学金給付事業」の2025年度奨学生として、6名の奨学生を決定しました。今後、日本文化を学ぶ機会や交流の場を設け、奨学生同士や当協会とのつながりを深めて、将来「日本と外国との架け橋」となる人材を育成していきます。



奨学金目録の贈呈



梁 璐
(リョウ ロ)さん
〈中国〉
九州大学
大学院芸術工学府
芸術工学専攻

この度は奨学金を賜り、誠にありがとうございます。郷土玩具を題材とした定格アニメーション制作を通じ、地域文化の魅力丁寧に伝えてまいります。ご支援に心より感謝申し上げます。



方 芳
(ファン ファン)さん
〈中国〉
京都市立芸術大学
大学院音楽研究科
日本音楽研究専攻

私の研究分野にご理解とご支援をいただき、心より感謝申し上げます。今後は芸術とテクノロジーの融合研究に注力し、国際的な文化交流に貢献できるよう努めてまいります。



YE KAILIN
(イェ カイリン)さん
〈オーストラリア〉
筑波大学人間総合科学学術院
人間総合科学研究群
世界遺産学学位プログラム

奨学金の支援をいただき、世界遺産専攻の研究に専念することができました。今後は研究を通じて得た経験を活かし、各地の伝建地区の発展に貢献していきたいと考えております。



李 季睿
(リ キエイ)さん
〈中国〉
筑波大学人文社会ビジネス科学学術院
人文社会科学研究群
国際日本研究学位プログラム

ご支援に感謝しています。日本語学習者の課題解決を中心に勉学と研究に励み、日本語とその奥に潜む日本文化を学習者に伝え、学習者をサポートできる教師となるよう努めてまいります。



張 曉然
(チョウ キョウゼン)さん
〈中国〉
東京大学大学院
総合文化研究科
言語情報科学専攻

日本の高度経済成長期の文学を冷戦期東アジアの文脈で研究しています。戦後日本の国民的想像力や文化的記憶が東アジアにどう響いていたのかを探り、歴史共有の架け橋になりたいです。



陶 国亮
(トウ コクリョウ)さん
〈中国〉
早稲田大学大学院
文学研究科
人文科学専攻

この度は奨学金をいただき、誠にありがとうございます。専攻分野の日本語研究を深め、将来は専門的な日本語教師として日中友好に貢献したいと考えております。今後も努力を重ねます。

事例発表会

助成団体の活動紹介

日本・カンボジア未来交流プログラム2024 〈2024年度助成〉

特定非営利活動法人 ACROSS

日本・カンボジア相互の 国際理解教育を目指して

このプログラムの目的は、①若者同士の国際理解の促進、②英語によるコミュニケーション体験、③カンボジアの女子教育の支援となっています。相互訪問の交流を通して、日本とカンボジアの若者の相互理解を深め、国際的な視野を広めることにより、両国の国際理解教育を推進することを目指しています。

2024年度は7回目の開催となりました。2025年1月にカンボジアの学生が日本へ来日し、北九州、京都、大阪、東京を訪問しました。現地の中学校や高校で授業に参加したり、フィールドワークを行ったりして、交流を図りました。また、2月には日本の学生がカンボジアを訪問し、



事例発表の様子

現地で様々な体験をしました。

2024年度の交流人数は800人を超え、参加者には、相手国の文化を体験できて貴重な時間を過ごすことができたと言われています。

秋津島太鼓祭 in EXPO 〈2025年度助成〉

秋津島太鼓祭

万博会場での和太鼓演奏で、 日本の伝統芸能の魅力を発信

事例発表の前半は、2025年7月3日に大阪・関西万博会場内にあるEXPOアリーナ MATSURIにて開催された「1,000人太鼓～輝け魂の鼓動～in EXPO 2025」の事業概要をご説明し、後半はそのメンバーの元気あふれる太鼓の演奏を行いました。

この事業の目的は、①日本の伝統文化・和太鼓の演奏を通じて、日本の芸能の魅力を広く発信する、②観る人々に感動を与え、日本芸術文化への理解を深めてもらう、③和太鼓製作の技術伝承のため、和太鼓愛好者の創出につながる施策をほどこす、などです。今回は万博会場に日本だけでなく世界中の太鼓演奏者が1,000人集結し、太鼓を打ち鳴らしました。1,000人が一つになって打ち鳴らした音はただの演奏ではなく、それぞれの「想い」が重なった“魂の鼓動”です。年齢も、国籍も、障がいの有無も越えて、太鼓という一つの楽器でつながることができた奇跡に、深く感動しました。この事業をきっかけに、和太鼓が「音楽」ではなく、「心と心をつなぐ架け橋」であることを沢山の方に感じていただき、今後も地域の垣根を越えた文化交流の場を大切に、活動を続けてまいります。



事例発表の様子



秋津島太鼓実演の様子

日本万国博覧会記念基金事業

世界 世界各国で助成が生かされています。
万博記念基金の半世紀を超える歴史の中で、助成を活用して建設された海外の施設についてご紹介します。

<第9回>

日本庭園・武道場（カナダ）



万博記念基金では、カナダで最も人口の多い都市トロントで1972年には日本庭園を、1999年には武道場が建設されるにあたり、助成を行いました。カナダ日系文化会館（旧：トロント日系文化会館）のエグゼクティブ・ディレクターであるジェロルド・マグラスさんより、現在の状況等をご報告いただきました。

助成年度	助成事業名	助成金額
1972年	日本庭園建設	13,477,500円
1999年	新館における武道場の建設	20,000,000円



日本万国博覧会記念基金のご支援により、カナダ日系文化会館は美と学び、そして文化交流の場を創出することができました。施設や所在地は時代とともに変遷しましたが、ご支援に込められた友情と文化的つながりの精神は、今もなお当館を物語る重要な一部として息づいております。

当館の道場は現在も非常に活発に利用されており、柔道、空手、合気道、杖道、剣道、弓道、居合道、薙刀の各プログラムを実施しております。これら武道プログラムは全て日本の団体と提携しており、国内外の武道連盟にも正式に認定されております。

設立から60年以上の歴史の中で、当館は数多くの優勝者や国際大会出場選手を輩出してまいりました。指導者たちは単に型やわざを教えるだけでなく、武道に深く根差した伝統や礼節も教育の重要な一部として伝えています。

また、クラスは年齢や経験レベルに応じて構成されており、年間4期のセッションを実施し、各期500名以上、年間合計で2,000名を超える参加者を受け入れております。



クリスマストーナメント団体戦（2002年12月21日）



助成先の事業紹介 2025年度助成事業の中から、事業者より寄せられた内容をご紹介します。

International Exchange Concert & Japanese Premiere of Dai Fujikura's 'Sho Concerto' for Yuki Deai

事業者：BIRMINGHAM CONTEMPORARY MUSIC GROUP 助成金額：300万円
実施期間：2025年4月13日～7月3日 実施場所：CBSOセンター(イギリス)、東京オペラシティリサイタルホール

1987年、サー・サイモン・ラトルによって設立された現代音楽の名門バーミンガム現代音楽グループ(BCMG)が、山田和樹の指揮で東京オペラシティリサイタルホールにて、革新的な演奏会を6月30日に開催しました。日本の現代音楽界を牽引する英国在住の作曲家・藤倉大が、雅楽器・笙のために作曲した日本初演となる新作『笙協奏曲』を、笙奏者・出会ユキを迎えて披露しました。さらに、レベッカ・サンダースによる空間的な響きが印象的な作品と藤倉大のアンサンブル作品『An Anthem』(日本初演)も演奏しました。古代の概念と現代の感性が交錯する、ジャンルを超えた音楽の力を体感でき、変化を恐れず常に新たな音楽の創造に挑むBCMGの演奏は貴重な機会となりました。



《バーミンガム公演》BCMG

愛知県芸術劇場 & 県内ツアー公演『CLUB ORIGAMI』

事業者：公益財団法人愛知県文化振興事業団 助成金額：500万円
実施期間：2025年7月23日～8月7日 実施場所：愛知県芸術劇場 小ホール、他県内6か所の劇場

イギリスを拠点に活躍する日本人ダンスアーティストを含むカンパニー「ICHI NI SAN」による、日本の伝統文化「折り紙」をモチーフとしたダンス、ファッション、生演奏が一つになった舞台芸術作品『CLUB ORIGAMI』を、愛知県の尾張地域・東三河地域・西三河地域の計7か所の劇場で巡回公演をしました。本作品は、世界17か国で1万人以上を動員した鑑賞・体験型パフォーマンスで、観客一人一人が創造を膨らませながらアーティストとともに舞台の一部である「紙」に触れ、作品を楽しみました。子どもはもちろん、大人にとっても新しい世界を知るきっかけとなり、心に残る劇場体験になりました。



(photo by HATORI Naoshi)

第7回東京国際合唱コンクール

事業者：一般社団法人東京国際合唱機構 助成金額：320万円
実施期間：2025年7月25日～7月27日 実施場所：第一生命ホール(東京都中央区)

第7回東京国際合唱コンクールは、合唱音楽の振興と国際交流の推進を目的に開催されました。日本を含め世界9つの国と地域から合唱団が集い、約1,500名の参加者がハイレベルの熱演を繰り広げました。各団体は厳正な音源審査を経て本選に臨み、クラシックから現代作品まで多彩なプログラムを披露。審査員には国内外の著名な指揮者・作曲家を招聘し、公平かつ高度な評価で実施しました。今年は東京都中央区の尽力もあって合唱団同士の交流イベントが実現し、国境を越えた合唱文化の理解促進と友好の深化を図ることができました。3日間にわたり延べ数千人の来場者が、国際都市・東京にふさわしい文化交流の場として大盛況のうちに幕を閉じました。



(写真：長谷川恭子)

アーツサポート関西 (ASK) の最新ニュースをお届けします

寄付を集めて関西の芸術・文化を支援する100%民間の取り組み、アーツサポート関西 (ASK)。関西・大阪21世紀協会に事務局を置き、いわゆる民間版アーツカウンシルとして、寄付者の意向によるファン・ド型支援やアーティストに寄り添った伴走型支援を行っています。

インターグループ上町台地現代アート寄金 ▶ 現代演劇

「上町台地にある旧真田山陸軍墓地と積み重なったまちの記憶をツバメと旅する春」の実施

上町台地の真田丸跡地の東側に広がる日本で最も歴史が古く、また最大規模の軍の埋葬地「旧真田山陸軍墓地」。2021年より演劇関係者や歴史研究者、地域住民らが中心となり、この場所が持つ意味を共有し、議論や対話へとつなげることを目的とした芸術活動が続けられています。2025年3月20日、その一環として墓地周辺をめぐる「まちあるきツアー」とパフォーマンスを組み合わせた公演が行われました。春の訪れを告げるツバメに扮した2名の俳優の先導で、墓碑列の間や墓地周辺を歩き「場所」を体験。続いて行われた室内のパフォーマンスでは、墓碑に名が刻まれた人々のうち、資料が残る数名について、資料から辿ったその人物像がいきいきと描かれました。まさに記録と記憶が交錯する場となりました。



旧真田山陸軍墓地での実施風景。石原菜々子(左)、高安美帆(右) 写真：石井靖彦

トヨタモビリティ新大阪ASK支援寄金助成 ▶ クラシック音楽

COLORFUL QUARTET 島之内教会でフルート四重奏の演奏会を開催

関西を拠点に活動する4人の若手フルート奏者たちにより2018年に結成されたフルート四重奏団、COLORFUL QUARTET。4名とも違う大学出身というカラフルな個性を生かし、自主企画のリサイタルを通してフルートの詩情豊かな響きを人々に届けています。特に力を入れているのが、フルートのために書かれたあまり知られていない楽曲の紹介。演奏会ではそうした曲を含め、フルートの魅力を存分に引き出します。2025年4月26日に大阪・心斎橋近くの島之内教会で開催されたコンサートでは、ヴィヴァルディやドビュッシーなどの知られた曲をフルート四重奏で演奏したほか、下田和輝、渡部哲哉、三浦真理ら日本の現代作曲家によって書かれたフルート用の室内楽曲を披露。教会の凛とした空間に美しいフルートの音色を響かせ、会場の人々を魅了しました。



左から、北川聖香、朴優栄、森田侑里奈、葛城郁也(会場：島之内教会／大阪)

一般助成 ▶ 音楽

immeasurable「聴くことのアレゴリー 02」の開催

商業ベースにのりにくい実験的な音楽を世に送り出す音楽レーベルimmeasurable（イメジャラブル）。Immeasurableとは「計り知れない」といった意味をもち、知覚される音楽と物理的に存在する音との関係を、メディアを介して探求する試みを行っています。2023年に続き、人々が集まり、その場に生じる音を知覚的・経験的に共有するイベント「聴くことのアレゴリー02」を、5月24日に神戸のspace eauuuで開催。fendoap、岡千穂、peeqの3名の若手注目音楽家を招き、デジタルで生成される「音楽」をテーマに3部構成で行われました。第1部では紙コップをスピーカーに3名それぞれがデジタルで作られた音楽を演奏。第2部では「音楽」の魅力を語り合い、第3部では3名が即興を交えた合奏を披露し会場を沸かせました。デジタル／アナログ、音／音楽の境界を考察する公演となりました。



「聴くことのアレゴリー 02」演奏風景
左からfendoap、岡千穂、peeq(会場：space eauuu)

一般助成 ▶ 舞台芸術

劇団三毛猫座 展覧会と演劇が融合した公演「優美な死骸の採集」の開催

劇団三毛猫座は、2015年に京都市立芸術大学で美術を学ぶ学生らが旗揚げし、今年で10周年を迎えます。現在のメンバーは全員女性。抽象的・装飾的な舞台美術に多量の言葉を持ち込む「聞く舞台」を創出し、視覚と言語の融合の可能性を探ります。今回の公演もそんな演劇の可能性を拡大する試みとなりました。会場となったTHEATRE E9 KYOTOの空間に詩やドローイングを展示する「展覧会」を開催(5/29～6/1)。かつてシュルレアリストが行った詩作技法「優美な死骸」に依拠し、長年劇団が取り組んできた膨大な数にのぼる詩とドローイングで空間を埋め尽くしました。その空間で、会期中数回にわたり、女性たちが暗がりに向けて言葉を解き放つモノローグ的なパフォーマンスを演じました。演劇に備わる言葉と視覚を媒介する役目を感じさせる公演となりました。



劇団三毛猫座「優美な死骸の採集」会場風景(会場：THEATRE E9 KYOTO)
写真：駒和樹

一般助成 ▶ 音楽

日野浩志郎 打楽器のみによるミニマリスティックな音楽の公演「Chronograffiti」

日野浩志郎さんは、大阪を拠点に自身のバンドの活動や、太鼓芸能集団「鼓童」とのコラボレーションなどで音楽の規範に挑み続ける世界的に注目される音楽家・作曲家。この公演は、ドイツのMoers Festivalの委嘱で作曲され、6月に世界初演された曲の日本初演となりました(7/25～27、クリエイティブセンター大阪)。タイトル「Chronograffiti」は、時間(Chrono)と視覚(graffiti)を融合させた言葉です。演奏は卓越した技量を持つ3名の打楽器奏者によって行われ、ボンゴなどの最小限の打楽器のみを用い、繰り返されるリズムの陶酔によって聴く者に高揚感をもたらしめます。加えて古館健によるヴィジュアルエフェクトによって演奏者たちの激しい手の動きが空間に優美な残像の軌跡を描き、原初的な音楽ともいえるべき「リズム」が精神の深層に作用することを、音と視覚の両面から実感させる公演でした。



日野浩志郎作曲による公演「Chronograffiti」の演奏風景。
左から、谷口かな、安藤巴、前田剛史
(会場：Black Chamber／クリエイティブセンター大阪) 写真：井上嘉和

(敬称略)

国指定重要無形民俗文化財 住吉大社 御田植神事 (2025年6月14日／住吉大社)

◆協賛：公益財団法人関西・大阪21世紀協会

古式ゆかしい華やかな神事

211年、神功皇后が住吉大社へ奉る神田を定め、長門国(現在の山口県)から植女を召して田植を奉仕させたことに始まると伝えられている住吉大社の御田植神事。明治初期に担い手の喪失や神田の払い下げにより廃絶の危機に瀕しましたが、大阪新町廓が御田を買い上げて住吉大社へ寄進したことで伝統は守られました。1979年には国が重要無形民俗文化財に指定。現在も、地域の人々の手によって厳かに執り行われ、古式ゆかしい所作や装束が受け継がれています。関西・大阪21世紀協会は、この神事の文化的価値を広く伝え、未来へとつなぐ活動に協賛しています。



御田植神事・童女の住吉踊り(写真提供：住吉大社)

日本万国博覧会記念公園シンポジウム2025 (2025年11月8日／国立民族学博物館)

◆主催：公益財団法人千里文化財団 ◆共催：大阪府、国立民族学博物館

◆協力：公益財団法人関西・大阪21世紀協会、国立大学法人大阪大学、公益財団法人大阪日本民芸館、大阪モノレール株式会社、万博記念公園マネジメント・パートナーズ

◆後援：NHK大阪放送局、公益社団法人関西経済連合会、吹田市

新たなレガシー — 2025年大阪・関西万博を後世へ

「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマとする2025年大阪・関西万博の開催にあわせ、2021年から毎年シンポジウムを開催してきました。最終年となる今回は、万博を通じて生まれる人と人とのつながりや対話、共創のプロセス、そしてパビリオンの再活用に見られる資源循環型の取り組みなどに焦点を当てました。ディスカッションでは、万博の成果を一過性のものに終わらせることなく、今後の社会において活用可能な形でどのように継承していくかについて、1970年大阪万博のレガシーも参照しながら、有識者が意見を交わし、持続可能で開かれた社会の実現に向けた連携と、未来へ継承すべき新たなレガシーについて多角的に考察しました。



関西初!!

「スマホ」でかんたん
少額からできる

ぽちっ と募金

あなたの想いを

「ぽちっ」と届けよう

Jcoin

J-Coin Pay「ぽちっ」と募金」で募金の受付を開始!

〜少額から簡単にあなたの寄付でアーティストや芸術・文化活動の支援を〜

「ぽちっ」と募金」とは

J-Coin Pay(店頭での支払い、送金、入出金をスマホで行えるアプリ)を利用して、復興支援や国際協力、医療・福祉、文化・芸術、スポーツ振興などの支援を行う団体に対し、少額から募金できるサービスです。(J-Coin Payについては ▶ <https://j-coin.jp/>)

公益財団法人関西・大阪21世紀協会は、大阪・関西を中心に、文化の振興を通じて都市の活性化に寄与するため、様々な芸術・文化活動にできる限りの支援を行うとともに、様々なイベントの文化プログラムでの結節点機能の役割を果たすことを目的に活動しています。

現在、株式会社みずほ銀行が提供し、全国90以上の金融機関が参画するスマホ送金・決済アプリ「J-Coin Pay」内で実施している「ぽちっ」と募金」から公益財団法人関西・大阪21世紀協会に寄付することが可能となっています。

このような取り組みにご賛同いただける方は、この「J-Coin Pay」アプリを通じて、寄付をしていただくことができます。金額は500円からで、「ぽちっ」と募金」で寄せられたご寄付は、アーティストへの支援を拡充していくための費用として活用されます。何卒、ご支援賜りますようお願いいたします。

詳しくは関西・大阪21世紀協会ホームページへ

<https://www.osaka21.or.jp>

関西・大阪21世紀協会賛助会員
入会のお願い

関西・大阪の活性化のため、皆様のご支援をお願いします。

会費(何口からでも結構です)

■法人会員 1口につき年会費10万円
■個人会員 1口につき年会費 1万円

お問合せ (公財)関西・大阪21世紀協会

特典

1. 協会が発行する刊行物の配布
2. 協会が主催する各種セミナーなどへの案内
3. 賛助会員の参考となる情報・資料の提供など

総務部(TEL.06-7507-2001)